

## 20240508 韓国ではオーガニック野菜給食が当たりまえ！しかも無償！

このゴールデンウィーク中に床屋に行きました。私が未就学の頃よりずっとお世話になっている床屋さんです。ご主人は、70歳をとうに超えられています。今でもゴルフコンペでトロフィーをもらってくる元気な方です。ところで、本棚の上に虫かごがあったので気になって伺ったら、中にはキリギリスがいるとのこと。確かに、キャベツの切れ端がかごの中にあります。驚いたのは、このキリギリスはスーパーで買ったキャベツの中から出てきたというのです。まだほんの小さい幼虫だったそうですが、キリギリスは不完全変態ですから、赤ちゃんのころから見た目はキリギリスです。それが、もりもりキャベツを食べて、随分大きくなったと話してくれました。

「普通農薬でやられちゃうところだけど、よくもまあ生き残っていたものだと感心して育てることにしたんだよ」

と、ご主人の言。ともすると、「こんなものを売りつけやがって！」と、店に文句をつける人もいそうなのに、心の広いお人だと感心しました。聞くと、契約農家のコーナーで買ったとのこと、なるほど、オーガニックかと納得しました。

話は変わりますが、給食室で最も気をつけることのひとつが「異物混入」です。可能性として大きいもののひとつが「虫」です。五小では800食を作ります。ほんの小さな青虫が一つでも混入していたら大問題です。これからの季節は、米につく虫にも気をつけなければなりません。これを防ぐために、何度も何度も水洗いを行います。これは、給食に限ったことではありません。レストランで虫が混入していたら、「オーガニックですね！」という会話にはおおよそならないでしょう。買ってきたリンゴが虫食いだったら、丸ごと生ゴミ行きでしょう。日本人の潔癖さはすごいです。もし、日本で給食をオーガニック野菜にしたら、給食室は大パニックになるかもしれません。絶対虫のいない野菜しか日本人は食べません。農薬をしっかりと使うことは、流通する野菜をつくる上で欠かせないプロセスなのです。健康以上に見た目、イメージが大切なのです。

さて、このオーガニック野菜ですが、お隣韓国では、実は給食のオーガニック化が着実に進んでいます。

温暖湿潤な気候で決して無農薬農業に適しているわけではない、高齢化による深刻な担い手不足、コメ離れによる米価低迷など、韓国は日本とよく似ています。そんな韓国と日本の大きな違いは、韓国は1990年代に国策として有機農業が振興されてきたという点です。環境保全を考慮して栽培された農産物を

韓国では「親環境農産物」と呼びます。

韓国が親環境農産物に大きく舵を切ったきっかけは、WTO体制下で貿易の自由化が促進されたことでした。海外の安い農作物に対抗するには、安全性を売りにするしかないという方針を打ち出したのです。そこでは、持続可能な農業による農業と環境の調和を目指しています。

そして、この親環境農産物が給食で確固たる位置を占めている理由は、

- ①政府主導の親環境農産物振興
  - ②盛んな市民運動
  - ③市民運動を背景にした地元自治体の農業支援
- があります。

小平市も地元農家で生産された野菜を給食に使っていますが、その割合は30%にも及びます。これは、小平市の補助金なしには考えられません。行政の努力には本当に感謝です。

韓国でも、小平市のように、もともと学校（市）と学校周辺農家との連携による食材提供が行われていました。そのような中、2003年に「学校給食の直営化、国産化、無償化」を公約の一つに掲げていた盧泰愚氏が大統領に当選しました。しかし、当選はしたものの、学校給食の公約は一向に進む気配がありません。「公約を守れ」との市民運動が各地で起きる事態となりました。給食が政治運動の火付け役になってしまったわけですが、結果的に、給食の直営化、国産化、無償化が進み、それと併せて、こどもたちに安全な食をとという保護者の願いから親環境農産物の活用が推進されました。

韓国国内の親環境農産物の生産自体は、2010年をピークに減少傾向になっています。しかし、給食食材としての需要は2000年以降伸び続けています。勢いを失いかけた親環境農産物の生産を学校給食がカバーしている形になっています。

2021年から、韓国ソウルの全ての小・中・高校で「オーガニック無償給食」がスタートしました。予算は、市教育庁が50%、ソウル市30%、自治区20%で、年額700億円を見込んでいるとのこと。

学校給食を無農薬野菜にしようとか、無償化しようとかいうことは、ただ黙って日々を一生懸命に生きていたら、自然とそうになっていったということではないと思います。そこには、我が子に安全な食を日々届けたいとの熱い親の心があったのだと思います。自分の考えや願いをしっかりとち、人と人が繋がって、もっとよりよい未来を創っていきたいという行動があったからだだと思います。問題を深く自分のこととして捉え、願いをもって行動する、そうした経験や学びは、これからの教育にとっても重要だと考えます。